

# 虹の絵具皿

(十力の金剛石)

宮沢賢治

青空文庫



むかし、ある霧きりのふかい朝でした。

王子はみんながちよつといなくなつたひまに、玻璃はりでたたんだ自分のお室へやから、ひよいつと芝生しばふへ飛とびおりました。

そして蜂はちすずめ 雀すずめのついた青い大きな帽子ぼうしを急いそいでかぶつて、どんだん向むこうへかけ出しました。

「王子さま。王子さま。どちらにいらつしやいますか。はて、王子さま」

と、年よりのけらいが、室へやの中であつちを向むいたりこつちを向むいたりして叫さけんでいるようすでした。

王子は霧きりの中で、はあはあ笑わらつて立ちどまり、ちよつとそつち

を向むきましたが、またすぐ向むき直なおつて音をたてないように剣つるぎのさやをにぎりながら、どんだんどんだん大臣だいじんの家の方へかけました。

芝生しばふの草はみな朝あさの霧きりをいっぱいに吸すつて、青く、つめたく見えませんでした。

大臣だいじんの家のくるみの木が、霧きりの中から不意ふいに黒く大きくあらわれしました。

その木の下で、一人ひとりの子供こどもの影かげが、霧きりの向むこうのお日ひ様さまをじつとながめて立たつていました。

王子は声をかけました。

「おおい。お早あそう。遊あそびに来たよ」

その小さな影はびつくりしたように動いて、王子の方へ走って来ました。それは王子と同じ年の大臣の子でした。

大臣の子はよろこんで顔をまっかにして、

「王子さま、お早うございます」と申しました。

王子が口早にききました。

「お前さつきからここにいたのかい。何してたの」

大臣の子が答えました。

「お日さまを見ておりました。お日さまは霧がかからないと、まぶしくて見られません」

「うん。お日様は霧がかかると、銀の鏡のようだね」

「はい、また、大きな蛋白石の盤のようでございます」

「うん。そうだね。僕はあんな大きな蛋白質があるよ。けれどもあんなに光りはしないよ。僕はこんど、もつといいのをさがしに行くんだ。お前もいつしよに行かないか」

大臣の子はすこしもじもじしました。

王子はまたすぐ大臣の子にたずねました。

「ね、おい。僕のもってるルビーの壺やなんかより、もつといい宝石は、どっちへ行ったらあるだろうね」

大臣の子が申しました。

「虹の脚もとにルビーの絵の具皿があるそうです」

王子が口早に言いました。

「おい、取りに行こうか。行こう」

「今すぐでございますか」

「うん。しかし、ルビーよりは金剛石の方がいいよ。僕黄色な

金剛石のいいのを持つてるよ。そして今度はもつといいのを取

つて来るんだよ。ね、金剛石はどこにあるだろうね」

大臣の子が首をまげて少し考えてから申しました。

「金剛石は山の頂上にあるでしょう」

王子はうなずきました。

「うん。そうだろうね。さがしに行こうか。ね。行こうか」

「王さまに申し上げなくてもようございますか」と大臣の子が

目をパチパチさせて心配そうに申しました。

その時うしろの霧の中から、

「王子さま、王子さま、どこにいらつしやいますか。王子さま」と、年とつたけらしいの聲が聞こえて参りました。

王子は大臣の子の手をぐいぐいひっぱりながら、小声で急いで言いました。

「さ、行こう。さ、おいで、早く。追いつかれるから」

大臣の子は決心したように剣をつるした帯革を堅くしめ直しながらうなずきました。

そして二人は霧の中を風よりも早く森の方へ走って行きました。

\*

二人はどんどん野原の霧の中を走って行きました。ずうつとうしろの方で、けらいたちの聲がまたかすかに聞こえました。

王子ははあはあ笑いながら、

「さあ、もう少し走つてこう。もう誰も追いつきやしないよ」

大臣の子は小さな樺の木の下を通るとき、その大きな青い帽子を落としました。そして、あわててひろつてまた一生けん命に走りました。

みんなの声ももう聞こえませんでした。そして野原はだんだんのぼりになってきました。

二人はやつと馳けるのをやめて、いきをせかせかしながら、草をばたりばたりと踏んで行きました。

いつか霧がすうつとうすくなつて、お日さまの光が黄金色に透つてきました。やがて風が霧をふつと払いましたので、露はきら

きら光り、きつねのしつぽのような茶色の草穂は一面波を立てました。

ふと気がつきますと遠くの白樺の木のこちらから、目もさめるような虹が空高く光ってたっていました。白樺のみきは燃えるばかりにまっかです。

「そら虹だ。早く行ってルビーの皿を取ろう。早くおいでよ」

二人はまた走り出しました。けれどもその樺の木に近づけば近づくほど美しい虹はだんだん向こうへ逃げるのでした。そして二人が白樺の木の前まで来たときは、虹はもうどこへ行ったか見えませんでした。

「ここから虹は立ったんだね。ルビーのお皿が落ちてないか知ら

ん」

二人は足でけむりのような茶色の草穂くさほをかきわけて見ましたが、ルビーの絵えの具皿ぐざらはそこに落おちていませんでした。

「ね、虹にじは向むこうへ逃にげるときルビーの皿ざらもひきずって行つたんだね」

「そうだろうと思います」

「虹にじはいつたいどこへ行つたらうね」

「さあ」

「あ、あすこにいる。あすこにいる。あんな遠とほくくにいるんだよ」  
大臣だいじんの子はそつちを見ました。まっ黒な森の向むこう側がわから、

虹にじは空高く大きく夢ゆめの橋はしをかけていたのでした。

「森の向むこうなんだね。行つてみよう」

「また逃にげるでしよう」

「行つてみようよ。ね。行こう」

ふたり

二人はまた歩き出しました。そしてもう柏かしわの森まで来ました。

森の中はまっくらで気味きみが悪いようでした。それでも王子は、

ずんずんはいつて行きました。小藪こやぶのそばを通るとき、さるとり

いばらが緑みどりいろ色のたくさんのかぎを出して、王子の着物きものをつか

んで引き留とめようとしてました。はなそうとしてもなかなかはなれ

ませんでした。

王子はめんどうくさくなつたので剣つるぎをぬいていきなり小藪こやぶをば

らんと切つてしまいました。

そして二人はどこまでもどこまでも、むくむくの苔こけやひかげのかずらをふんで森の奥おくの方へは行って行きました。

森の木は重かさなり合つてうす暗ぐらいのでしたが、そのほかにどうも空まで暗くらくなるらしいのでした。

それは、森の中に青くさし込こんでいた一本の日光の棒ぼうが、ふつと消きえてそこらがぼんやりかすんできたのでもわかりました。

また霧きりが出たのです。林の中はまもなくぼんやり白くなつてしまいました。もう来た方がどっちかもわからなくなつてしまったのです。

王子はためいきをつきました。

大臣だいじんの子もしきりにあたりを見ましたが、霧きりがそこらいつぱ

いに流れ、すぐ眼の前の木だけがぼんやりかすんで見えるだけです。二人は困ってしまつて腕を組んで立ちました。

すると小さなきれいな声で、誰か歌いだしたものがありません。

「ポツシヤリ、ポツシヤリ、ツイツイ、トン。

はやしのなかにふる霧は、

蟻のお手玉、三角帽子の、一寸法師のちいさなけまり」

霧がトントンはね踊りました。

「ポツシヤリ、ポツシヤリ、ツイツイ、トン。

はやしのなかにふる霧は、  
くぬぎのくろい実、柏の、かたい実のつめたいおちち」

霧がポシャポシャ降つてきました。そしてしばらくしんとしました。

「誰だろう。ね。誰だろう。あんなことうたつてるのは。二、三人のようだよ」

二人はまわりをきよろきよろ見ましたが、どこにも誰もいませんでした。

声はだんだん高くなりました。それはじょうずな芝笛のよう  
に聞こえるのでした。

「ポツシヤリ、ポツシヤリ、ツイ、ツイ、ツイ。

はやしのなかにふるきりの、

つぶはだんだん大きくなり、

いまはしずくがポタリ」

霧きりがツイツイツイ降ふってきて、あちこちの木からポタリツポタリツと雫しずくの音がきこえてきました。

「ポツシヤン、ポツシヤン、ツイ、ツイ、ツイ。

はやしのなかにふるきりは、

いまにこあめにかあわるぞ、

木はあみんな 青あお外がい套とう。

ポツシヤン、ポツシヤン、ポツシヤン、シヤン」

きりはこあめにかわり、ポツシヤンポツシヤン降ふってきました。

大臣だいじんの子は途方とほうに暮くれたように目をまんまるにしています。

「誰だれだろう。今のは。雨を降ふらせたんだね」

大臣だいじんの子はぼんやり答えました。

「ええ、王子さま。あなたのきものは草の実みでいっぱいですよ」

そして王子の黒いびろうどの上着うわぎから、緑みどり色のぬすびとはぎ

の実みを一ひらずつとりしました。

王子がにわかさけに叫びました。

「誰だれだ、今歌ったものは、ここへ出ろ」

するとおどろいたことは、王子たちの青い大きな帽子ぼうしに飾かざつてあつた二羽わの青びかりの蜂はちすずめ雀すずめが、ブルルブルツと飛とんで、二人ふたりの前に降おりました。そして声をそろえて言いいました。

「はい。何かご用でございますか」

「今の歌はお前たちか。なぜこんなに雨をふらせたのだ」

蜂はちすずめ雀すずめ はじょうずな芝しばふえ笛ふえのように叫さけびました。

「それは王子さま。私どもの大事だいじのご主しゅじん人さま。私どもは空をながめて歌っただけでございます。そらをながめておりますと、きりがあめにかわるかどうかよくわかったのでございます」

「そしてお前らはどうして歌ったり飛んだりしたのだ」

「はい。ここからは私どもの歌ったり飛んだりできる所になつて  
いるのでございます。ご案内いたしましょう」

雨はポツシヤンポツシヤン降つています。蜂雀はそう言い

ながら、向こうの方へ飛び出しました。せなかや胸に鋼鉄のは  
り金がいっているせいか飛びようがなんだか少し変でした。

王子たちはそのあとをついて行きました。

\*

にわかにあたりがあかるくなりました。

今までポシヤポシヤやっていた雨が急に大粒になつてぎあぎ

あと降つてきたのです。

はちすずめが水の中の青い魚のように、なめらかにぬれて光りながら、二人ふたりの頭の上をせわしく飛びめぐって、

ザツ、ザ、ザ、ザザアザ、ザザアザ、ザザア、

ふらばふれふれ、ひでりあめ、

トパス、サファイア、ダイヤモンド。

と歌いました。するとあたりの調子ちようしがなんだか急にきゆう変なぐあいにへんなりました。雨があられに変わかってパラパラパラやってきたのです。

そして二人ふたりはまわりを森にかこまれたきれいな草の丘おかの頂ちようじ、

上ように立たつていました。

ところが二人は全まったくおどろいてしまいました。あられと思つたのはみんなダイヤモンドやトパスやサファイアだったのです。おお、その雨がどんなにきらびやかなまぶしいものだったでしょう。

雨の向むこうにはお日さまが、うすい緑みどりいろ色のくまを取とつて、まっ白しろに光あつていましたが、そのこちらで宝ほうせき石の雨はあらゆる小さな虹にじをあげました。金剛こんごうせき石がはげしくぶつつかり合あつては青あおい燐りんこう光こうを起おこしました。

その宝ほうせき石の雨は、草くさに落おちてカチンカチンと鳴なりました。それは鳴なるはずだったのです。りんどうの花はなは刻きざまれた天アマゾン河ストン石

と、打ち劈かれたアマゾンストーンで組み上がり、その葉はなめらかなシリソコラ。黄色な草穂はかがやく猫睛石、いちめんのうめばちそうの花びらはかすかな虹を含む乳色の蛋たんばくせき、とうやくの葉は碧玉へきぎよく、そのつぼみは紫水晶アメシストの美しいさきを持つていました。そしてそれらの中でいちばん立派なのは小さな野ばらの木でした。野ばらの枝は茶色の琥珀こはくむらさきや紫がかつた霰アラゴナイト石みでみがきあげられ、その実はまっかなルビーでした。

もしその丘おかをつくる黒土をたずねるならば、それは緑青ろくしょうか瑠璃るりであつたにちがひありません。二人はあきれてぼんやりと光の雨に打たれて立ちました。

はちすずめがたびたび宝石ほうせきに打たれて落ちそうになりながら、

やはりせわしくせわしく飛とびめぐって、

ザツザザ、ザザアザ、ザザアザザア、

降ふらばふれふれひでりあめ

ひかりの雲のたえぬまま。

と歌いましたので雨の音はひとしお高くなり、そこらはまたひとしきりかがやきわたりました。

それから、はちすずめは、だんだんゆるやかに飛とんで、

ザツザザ、ザザアザ、ザザアザザア、

やまばやめやめ、ひでりあめ

そらは みがいた 土耳古玉。  
トルコだま

と歌いますと、雨がびたりとやみました。おしまいの二つぶばかりのダイヤモンドがそのみがかれた土耳古玉トルコだまのそらからきらきらつと光つて落ちました。

「ね、このりんどうの花はお父さんの所ところのいっとう一等のコップよりも美しいんだね。トパスがいっぱいに盛もつてあるよ」

「ええ立派りっぱです」

「うん。僕ぼく、このトパスをはんけちへいっぴい持もつてこうか。けれど、トパスよりはダイヤモンドの方がいいかなあ」

王子ははんけちを出してひろげましたが、あまりいちめんきらきらしているので、もうなんだか拾うひろのがばかっているような気がしました。

その時、風が来て、りんどうの花はツアリンとからだを曲まげて、その天アマゾン河石ストーンの花の盃さかずきを下むの方に向むけましたので、トパスはツアラツアランとこぼれて下のすずらの葉はに落おち、それからきらきらころがって草そこの底そこの方へもぐって行きました。

りんどうの花はそれからギギンと鳴おって起きあがり、ほつとため息いきをして歌いました。

「トパスのつゆはツアランツアリルリン、

こぼれてきらめく サング、サンガリン、

ひかりの丘おおかに すみながら

なあにがこんなになしかる」

まつ碧さおな空では、はちすずめがツアリル、ツアリル、ツアリル、ツアリル、ツアリル、ツアリル、ツアリル、ツアリルと鳴いて二人とりんどうの花との上をとびめぐっておりました。

「ほんとうにりんどうの花は何がかなしいんだらうね」王子はトパスを包つつもうとして、一ぺんひろげたはんけちあせで顔の汗をふきながら言いました。

「さあ私にはわかりません」

「わからないねい。こんなにきれいなんだもの。ね、ごらん、こ  
 ちのうめばちそうなどはまるで虹にじのようだよ。むくむく虹にじが湧わ  
 いてるようだよ。ああそうだ、ダイヤモンドの露つゆが一つぶはいっ  
 てるんだよ」

ほんとうにそのうめばちそうは、ぷりりぷりりふるえていまし  
 たので、その花の中の一つぶのダイヤモンドは、まるで叫さけび出す  
 くらいに橙だいだいや緑みどりに美しくかがやき、うめばちそうの花びらにチカ  
 チカ映うつつて言いいようもなく立派りっぱでした。

その時ちようど風が来ましたので、うめばちそうはからだを少  
 し曲まげてパリりとダイヤモンドの露つゆをこぼしました。露つゆはちくち  
 くつとおしまいへきぎよくの青光をあげ 碧へきぎよく 玉たまの葉はの底そこに沈しずんで行きまし

た。

うめばちそうはブリリンと起きあがってもう一ぺんサツサツと光りました。金剛石こんごうせきの強い光の粉こながまだはなびらに残のこつてもいたのでしょうか。そして空のはちすずめのめぐりも叫さけびも、にわかにはげしくはげしくなりました。うめばちそうはまるで花はなびらも尊たかもはねとばすばかり高く鋭すく叫さけびました。

「きらめきのゆきき

ひかりのめぐみ

にじはゆらぎ

陽ひは織おれど

かなし。

青ぞらはふるい

ひかりはくだけ

風のきしり

陽ひは織おれど

かなし」

野ばらの木が赤い実みから  
水すい晶しょうの雫しずくをポトポトこぼしながら  
しずかに歌いました。

「にじはなみだち  
きらめきは織おる  
ひかりのおかの  
このさびしさ。

こおりのそこの  
めくらのさかな  
ひかりのおかの  
このさびしさ。

たそがれぐもの

さすらいの鳥

ひかりのおかの

このさびしさ」

この時光の丘おかはサラサラサラツと一めんけはいがして草も花も  
 みんなからだをゆすつたりかがめたりきらきらほうせき宝つゆ石の露をはら  
 いギギンザン、リン、ギギンと起おきあがりしました。そして声をそ  
 ろえて空高く叫さけびました。

「十じゅうりき力こんごうせきの金剛石はきようも来ず

めぐみの宝いし石はきようも降ふらず

十<sup>じゅうりき</sup>力の宝石<sup>いし</sup>の落ち<sup>お</sup>ざれば、

光<sup>おか</sup>の丘<sup>かみ</sup>も まつくろのよる

ふたり  
二人は腕<sup>うで</sup>を組<sup>く</sup>んで棒<sup>ぼう</sup>のように立<sup>た</sup>つていましましたが王子はやつと気がついたように少しからだをかがめて、

「ね、お前たちは何がそんなにかなしいの」と野ばらの木にたずねました。

野ばらは赤い光の点<sup>てんてん</sup>々<sup>々</sup>を王子の顔<sup>かほ</sup>に反<sup>はん</sup>射<sup>しゃ</sup>させながら、

「今<sup>いま</sup>言<sup>い</sup>つた通りです。十<sup>じゅうりき</sup>力の金剛<sup>こんごう</sup>石<sup>せき</sup>がまだ来<sup>き</sup>ないのです」

王子は向<sup>む</sup>ここの鈴<sup>すず</sup>蘭<sup>らん</sup>の根<sup>ね</sup>もとからチクチク射<sup>さ</sup>して来る黄金<sup>きんいろ</sup>色の光をまぶしそうに手でさえぎりながら、

「十 力の金剛石こんごうせきってどんなものだ」とたずねました。

野のばらがよろこんでからだをゆすりました。

「十 力の金剛石こんごうせきはただの金剛石こんごうせきのようにチカチカうるさく光りはしません」

碧へきぎよく 玉たまのすずらんが百の月あつが集あつまった晩ばんのように光りながら

向むこうから言いいました。

「十 力の金剛石こんごうせきはきらめくときもあります。かすかににごることもあります。ほのかにうすびかりする日もあります。あるときは洞どう穴けつのようにまつくらです」

ひかりしずかな天アマゾン河ストーン石ストーンのりんどうも、もうとても踊おどりださ

ずにいられないというようにサアン、ツアン、サアン、ツアン、

からだをうごかして調子ちようしをとりながら言いました。

「その十力じゆうりきの金剛石こんごうせきは春の風よりやわらかく、ある時はま  
るくあるときは卵たまごがたです。霧きりより小さなつぶにもなれば、そら  
とつちとをうずめもします」

まひるの笑わらいの虹にじをあげてうめばちそうが言いました。

「それはたちまち百千のつぶにもわかれ、また集あつまって一つにも  
なります」

はちすずめのめぐりはあまり速はやくてただルルルルと鳴るば  
んやりした青い光の輪わにしか見えませんでした。

野のばらがあまり気が立ち過すぎてカチカチしながら叫さけびました。

「十力じゆうりきの大宝珠だいほうじゆはある時黒い厩きゆうひ肥ひのしめりの中に埋うもれ

ます。それから木や草のからだの中で月光いろにふるい、青白いかすかな脈みやくをうちます。それから人の子供こどもの苹果りんごの頬ほおをかがやかします」

そしてみんながいつしよに叫さけびました。

「十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは今日も来ない。

その十じゅうりき力の金剛石こんごうせきはまだ降ふらない。

おお、あめつちを充みてる十じゅうりき力のめぐみ

われらに下れ」

にわかにはちすずめがキーンとせなかの鋼鉄こうてつの骨ほねもはじけ

たかと思うばかりするどいさけびをあげました。びっくりしてそ  
 ちらを見ますと空が生き返つたように新しくかがやき、はちすず  
 めはまっすぐに二人の帽子ふたりぼうしにおりて来ました。はちすずめのあと  
 を追つて二つぶの宝ほうせき石がスツと光つて二人の青い帽子ぼうしにおち、  
 それから花の間に落ちました。

「来た来た。ああ、とうとう来た。十じゅうりき力の金剛石こんごうせきがとうと  
 う下つた」と花はまるでとびたつばかりかがやいて叫さけびました。  
 木も草も花も青ぞらも一度どに高く歌いました。

「ほろびのほのお 湧わきいでて  
 つちとひととを つつめども

こはやすらけき　くににして

ひかりのひとら　みちみてり

ひかりにみてる　あめつちは

.....」

きゆう

急に声がどこか別の世界に行ったらしく聞こえなくなってしまう

いました。そしていつか十じゆうりき力の金剛石こんごうせきは丘おかいっぱいに下つ

ておりました。そのすべての花も葉はも茎くきも今はみなめざめるばかり

立派りっぱに変わっていました。青いそれからかすかなかすかな楽がくの

ひびき、光なみの波、かんばしく清きよいかおり、すきとおった風のほめ

ことばが丘おかいちめんおにふりそそぎました。

なぜならばすずらんの葉はは今はほんとうの柔やわらかなうすびかりする緑みどりいろ色の草くさだったのです。

うめばちそうはすなおな、ほんとうのはなびらをもっていたのです。そして十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは野ばらの赤あかい実みの中のいみじい細胞さいぼうの一つ一つにみちわたりました。

その十じゅうりき力の金剛石こんごうせきこそは露つゆでした。

ああ、そしてそして十じゅうりき力の金剛石こんごうせきは露つゆばかりではありませんでした。碧あおいそら、かがやく太陽たいよう、丘おかをかけて行く風、花のそのかんばしいはなびらや、しべ、草のしなやかなからだ、すべてこれをのせになう丘おかや野原、王子たちのびろうどの上着うわぎや涙にかがやく瞳ひとみ、すべてすべて十じゅうりき力の金剛石こんごうせきでした。あの十じ

ゆうりき

だいほうじゆ

力の大宝珠でした。あの十力の尊い舍利でした。あの

じゆうりき

だれ

十力とは誰でしようか。私はやつとその名を聞いただけです。

ふたり

二人もまたその名をやつと聞いただけでした。けれどもこの蒼

あおた

鷹のように若い二人がつつましく草の上にひざまずき指を膝に

ゆび ひざ

組んでいたことはなぜでしようか。

そこ

さてこの光の底のしずかな林の向こうから二人をたずねるけら

ふたり

いたちの声が聞こえて参りました。

まい

「王子様王子様。こちらにおいででございますか。こちらにおい

さま

さま

ででございますか。王子様」

さま

二人は立ちあがりました。

ふたり

「おおい。ここだよ」と王子は叫ぼうとしましたが、その声はか

さけ

すれていました。二人はかがやく黒い瞳を、蒼ぞらから林の方に  
向けしずかに丘を下つて行きました。

林の中からけらいたちが出て来てよろこんで笑つてこつちへ走  
つて参りました。

王子も叫んで走ろうとしましたが、一本のさるとりいばらかに  
わかになすこしの青い鉤を出して王子の足に引っかけました。王子  
はかがんでしずかにそれをはずしました。

# 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1991（平成3）年6月10日改版65版

入力：土屋隆

校正：石橋めぐみ

2007年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 虹の絵具皿

(十力の金剛石)

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫  
著者 宮沢賢治  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>